

馬方と約束した時刻に合わせ、広東メンバーと私は4時には目覚めてベッドの中から抜け出した。中国の四川省は日本と比べて日の出が遅く、あたりはまだ完全な暗闇だ。懐中電灯のわずかな明かりを頼りに宿の入り口に行くと、昨夜の馬方達が自分の馬を連れて待っていた。馬方達は唇に指を当て「静かに」というゼスチャーをして見せると、私達に馬に乗るように促した。

私が目の前にいた馬にそっと跨ろうとすると、馬は私を迎え入れるように身を屈めてくれた。馬を引いている青年に「この馬は判ってるんだね？」とヒソヒソ声で話しかけると、「そうさ。彼らは判ってるんだよ。人の言葉だって理解できるんだ」と微笑みながら優しい手付きで馬の鼻を撫でた。

私達の騎馬隊は真っ暗闇の中を静かに出発すると、洛絨牛場の方向に向かって一列に並びヒタヒタと山道を登って行った。この先のルートが何処へ向かうのかは知らされていなかったが、きっと洛絨牛場を通過してあの宝石の湖のところまで登って行くのに違いない。そして湖の畔から更に山奥に向かって伸びていた道、私が初めてそこに訪れた日「この向こうにはどんな世界が広がっているのだろう・・・」と羨望の思いで眺めていた、あの道に進んで行くのに違いなかった。

初めて垂丁を訪れた時から、ずっと胸の中にひっかかっていた望みが今日叶うのだ。私は馬の背にゆられながら、これから始まる旅への期待と興奮に震える思いだった。

ところがである。暫く山道をすすんでいた騎馬隊は何故か急に歩みを止めてしまったのだ。

列の後方にいた私には暗闇の中で何が起こったのか判らなかった。馬の背に跨ったまま暫く待っていたが騎馬隊が再び進みはじめる事はなく、不意打ちの様に懐中電灯の光が私の顔に当てられた。目を射る眩しさに思わず顔をそむけた瞬間、私の耳に「なんだ小姐、あんたまで混っていたのか」と、呆れたような声が響いてきた。ハツとして声の主を見返すと私の目の前に懐中電灯の明かりに照らされて浮かんでいたのは管理人の腕章を腕に巻きつけたあの男だ。

「さあ、逆戻りだ。宿に帰りなさい」

「ええ!？」

何が起こったのか判らなかった。

「嫌よ!!何で戻らなきゃならないの!？」

「君達の馬は許可されていない。君達が行こうとしているコースもだ。さあ、宿に帰ってもう一度眠るんだな」

「ええええ〜っ!!嫌よ!行きたい!!」

どうしようもなかった。馬方の指示で馬はノロノロと向きを変え、今来た道をトボトボと引き返し始めた。何がなんだか解らなかったが、夢のホーストレッキングがダメになってしまった事だけは判った。泣き出したいような気持ちで馬の背に揺られているうちに、おぼろげながら状況が読めてきた。

この数日間の滞在で薄々気づいていたのだが、垂丁自然保護区はこんな人里離れた僻地の山奥にありながら観光地として完全に行政に管理されている土地なのだ。自然保護区内の宿も馬も管理局の許可が下りている場所では観光客の利用は許されておらず、その売り上げ金は行政の収益となるようなシステムとなっているのに違いない。馬に乗って移動できる行動範囲も自然保護区の入力から洛絨牛場までと制限されているのだろう。

だがこれも稻城のタクシーと同じで、僻地の寒村に暮らす村人にとって観光客から手軽に高額な現金収入が得られる仕事は魅力的なのだ。そこで彼らは管理人の目を盗み、直接観光客にもぐりの営業をかけているのだろう。このツアーの出発が日の出にまだだいぶ間のある真っ暗な早朝なのも、音を立てないように気を使いひっそりと出発したのも、管理人にツアーの出発を悟られないための策だったのだ。

だが管理人の方でもそんな彼らの行動パターンを読んでいて、朝まだ暗い早朝から未明のパトロールをしていたらしい。

ついてない・・・

先程までの高揚した気分が破裂してべちゃんこにしぼんだ風船の様な気持ちで宿に戻った。

沖古寺の宿に戻った時もまだ辺りは暗闇につつまれていた。ショックで何も考えたくない。みんな黙ったままそれぞれの布団の中にもぐりこんだ。

数時間ウトウトした後、同室の広東メンバーの話し声で目が覚めた。目を開けると外はとっくに明るくなっていた。「私達は正規の馬を雇って洛絨牛場まで行く事にするけど、あなた一緒に行く?」

広東メンバーの一人が私に声をかけた。

私だって一度はあの宝石の湖に再び訪れる気持ちになってしまったのだ。このままでは気持ちの納まりが着かないし、旅は道連れ、乗りかかった船だ。

「うん。日本円を両替してもらえるなら私も馬を雇って一緒に行く。そして牛場から歩いて湖を見に行きましょうよ。私が案内するわ!」

広東メンバーの青年に私の一万円を中国元に両替して貰った。彼は持っていた携帯電話を使って当日のレートを調べようとしたが上手く行かず、私の「多分650元くらいだと思うけど…」の言葉に「判った。君を信じるよ」と心良く両替してくれた。急いで荷物をまとめ、山で必要なもの以外の詰まった大きなザックは沖古寺の宿で預かってもらって私達は出発した。

この日二度目の馬に乗り、私達は洛絨牛場を目指していた。二日前、もうこれでお別れだとなごりをおしんだ宝石の湖にもう一度訪れる事ができると思うと、夢のホーストレックがお釈迦になって意気消沈していた気分も少しは慰められた。せめて今日こそは太陽の光をあびてコバルトブルーに燃え上がるあの湖を見たい。私はしきりに空の状態を気にしていた。薄日が差したかと思うと曇り、曇ったかと思うと再び日が差してくる。天候の状態は安定していなかった。

洛絨牛場に向かってしばらく進むうち、広東メンバーの一人が体調不良を訴え始めた。昨夜から軽い高山病の症状を訴え具合の悪そうな顔をしていた青年だ。徐々に強まってくる頭痛に加えて、吐き気まで感じているようだ。

沖古寺より洛絨牛場の方が標高はだいぶ高くなる。彼がこれ以上進むのは無理だという事になり、青年とその恋人らしい女の子はそこから宿の方向に引き返して行った。せっかくここまでやってきて何も見られないなんて気の毒だ。

土地の人間でもなくせに人一倍亜丁の自然に愛着を感じ、一人でも多くの人にこの土地の美しさを味わって欲しいなどという気持ちになっていた私は、残念な思いで彼らを見送った。もし今朝のホーストレックが予定通りに行われていたとしても、結局この二人は参加できなかったという訳だ。

ところがである。この旅で二度目の洛絨牛場に到着して馬を降り立った私が振り向くと、広東メンバー残り四人のうち、更に二人が頭を抑えながら全く浮かぬ顔をしていた。メンバーの中ではリーダー格らしくみんなをまとめている男性と、その恋人らしい最初に私をホーストレッキングの仲間に誘ってくれた女性の二人だ。

二人はそそくさと数枚の写真を撮ると、

「ダメだ。頭がガンガンするし胃がムカムカする。これ以上ここには居られないから俺達はこれで山を下る事にするよ」

と、私達に告げた。

「え～！だって、たった今着いたばかりなのに・・・」

全くなんてことだ。先程まで馬に揺られながら私はまだダメになってしまったホーストレックへの未練が断ち切

れずにグジグジと自身の不運を嘆いていたのだが、結局こんな状態では初めからトレックツアーを決行するのは不可能だったのだ。あのまま管理人に見つからずにいたとしても、数キロ先で自発的に引き返して来る事になっていたのだろう。

そう思ったら、ダメになってしまったツアーへの諦めも少しはつくように思えてきた。

だけど湖は！？

「ねえ、あなた達はどうするの！？この先の景色はもっともっと綺麗だし、湖は本当に素晴らしいのよ！！せっかく此処まで来て全員が何も見ずに帰っちゃうなんてもったいない！私はあなた達に見て欲しいの。私が案内するから行きましょうよ！！」

私は残りの二人に尋ねた。お金を両替してくれた青年とその恋人だ。

私の懸命の説得に二人は興味をひかれたらしく、

「わかったわ。あなたがガイドしてくれるなら行きましょう」と決断してくれた。

ところがだ。せっかく話が決まって張り切り始めた私達に再び水を差すように乗ってきた馬の馬方達が文句を言い始めたのである。

湖までの道のりは私達の足でほぼ3時間。往復してこの場所に戻ってくるのはおよそ6時間後になるが、そんなに待つ事はできないと言うのだ。

私達の雇った馬は沖古寺から洛絨牛場まで往復での契約だった。私は自分の馬を雇う際に、馬は洛絨牛場まで来るための片道だけで十分だと主張したが、先方は往復料金を払わなければ馬はチャーター出来ないと言い張ってひと悶着あり、しぶしぶ往復で雇った馬だというのに、今になって全く面倒な話だ。馬を雇った時点で私達は湖に行く話はしていたし、自分の雨具を持っていなかった広東メンバーには山に行くならコシを持っていけと有料で雨合羽の貸し出しまでされていたのだ。

「私達は湖を見るために此処まで来たんだから、待ってくれたっていいじゃない！？それがあなた達の仕事でしょ！？」

広東メンバーの女性も私の主張に加勢してくれたが押し問答はいつまでも終わらない。とうとう彼女が言った。

「判ったわ、お金で話をつけましょう。あなた達が待てるという2時間を過ぎたら、1時間につき10元払うわよ。これでいいでしょ！？」

彼女の提案には馬方達も納得したらしく多少後味の悪い出発になってはしまったが、私達三人は数々の困難を乗り越えて、彼らにとっては初めての、私にとっては再探訪の湖の旅へと出発した。

(次号に続く)